

## [解題と翻訳]

# ジョゼフ・バトラーの人格同一性論

矢嶋 直規

### [解題]

#### 1. バトラーの時代と生涯

宗教改革の余波と自然科学の発展は17-18世紀の英国哲学に甚大な影響を与えていた。哲学と宗教にとっての大きな課題は、トマス・ホッブズの機械論的哲学が含意するように思われた無神論の傾向への対応であった。ホッブズ自身は無神論を主張したのではなく、またホッブズによる道徳哲学の基礎づけは利己主義を規範的理論として主張するものではなかったが、伝統的キリスト教に基づく道徳論を根底から揺るがすインパクトを伴っていた。こうした状況で、いかにして神の存在に基づく信仰を確保し、科学と両立する道徳論を提示するかがホッブズ以降の哲学者の課題となった。

ジョン・ロックは神の存在を論証可能とし、キリスト教を迷信や非科学的ではない理にかなった宗教として擁護しようとした。ところがロックの意図に反して、啓示を理性的に正当化しようとする試みは、理神論を勢いづかせることになった。ジョン・トーランドはロックの影響のもとに理神論を一層過激な主張にした。それに対して、サミュエル・クラークは、自然神学の立場から、神の存在と属性を論証し、無神論と理神論を批判する理論を展開した。これらがバトラーの思想的背景をなしている。

バトラー（1692-1752）はイングランド、バークシャーの長老派の引退した商人の家庭に生まれ、チュケスベリーの非国教徒のためのサムエル・ジョーンズ学院で学んだ。早くから学問で頭角を現し、1713年11月、当

時ニュートン主義の神学者として名声を博していたクラークに、彼のポイルレクチャーに基づく著書についての書簡を送り、1714年8月までにクラークと5往復の書簡の交換を行った。サムエル・ジョーンズ学院在学中に国教に転向し、1714年当時国教徒にのみ門戸が開かれていたオックスフォード大学のオリエル・カレッジに入学した。クラークは、1716年にバトラーとの往復書簡を含む書簡集を出版した。バトラーはクラークの後ろ盾も得て国教会の主導的人物となり、権威あるロールズ・チャペルでの説教を担当し、1750年にはグラム主教の地位にまでのぼり詰めた。また1736年にはキャサリン女王、1747年にはジョージ二世の個人牧師も務めた。バトラーの主著はロールズ・チャペルでの説教を集めた『十五説教』、および『宗教の類比』である。学識に優れた神学者として名声が高く、特に、デイヴィッド・ヒュームやトマス・リードに大きな影響を与えた。その死後もチャールズ・ダーウィンが登場するまでのおよそ百年にわたり、英国で最も広く読まれた神学者であった。ダーウィン以降は自然神学への関心の衰退とともに、20世紀に入ると忘れ去られた神学者として扱われるようになった。

## 2. 人格同一性論の理論的文脈

今回訳出した論文「人格同一性について」は、『宗教の類比』の付論として出版された二論文の一つである。当初バトラーは当論文を『宗教の類比』第一章「来世について」の一部としていたが、独立論文として世に問うことにしたと述べている。しかしバトラー自身が内容的に密接に関連していると主張している通り、人格同一性の議論の文脈を押さえることは重要である。

「来世について」の章で、バトラーは死後の生の存在を論じる。バトラーの方法は類比であり、この世の経験に基づいて来世の存在が蓋然的に思惟可能であることを示そうとする。バトラーによれば、肉体は行為者が世界を知覚するための道具であり、肉体の存在は行為者の存在と同一では

ないとされる。バトラーは目を眼鏡にたとえ、眼鏡も目も無くなることが可能であるが、眼鏡が見るのではないように目が見るのではないと主張する。意識は単一で分割不可能であるが、肉体は分割可能である。肉体の一部が失われても行為者が存在しなくなることはないから、たとえ肉体がすべて滅びても行為者が存在しなくなることは必然ではないとされる。生の原理と死の原理を区別し、肉体と精神を峻別する点でバトラーには合理主義哲学の影響がみられる。

来世の存在を自然との類比によって想定するにあたり、バトラーは自然とは何かについての理解はわれわれの自然理解の進化によって変化すると主張する。また神の創造物についての知識や神の摂理についての知識が増大するにしたがって、自然の理解は広まり、死後の生を含むキリスト教の教えが自然に思えることも可能であるとしている。このようにバトラーは、伝統的な神の存在証明の論証に代えて、われわれの無知を前提としつつ、経験の蓋然性に基づく類比によってキリスト教の教えを信じる根拠を提示しようとした。人格同一性の議論も、まさにこの目的のための議論にほかならない。

現世と来世との間にわれわれの人格同一性が成立しなければ、来世の存在はわれわれの信仰にとって意味のない主張となる。来世の存在が意味を持つためには、来世を生きるのがこのわれわれ自身でなければならない。つまり、来世の存在とは現世と来世にわたるわれわれの人格同一性の成立を意味する。さらに現世の自己と来世の自己の同一性は、道徳的な因果関係の主体であることの条件となる。すなわち現世において行った行為の道徳的な報いを来世の自己が受けるという仕方での同一性が構想されている。こうしてバトラーにおいて人格同一性とは、われわれが来世において神の道徳的支配に服し正しい裁きを受けるという信仰を正当化するための理論なのである。

### 3. ロックの人格同一性論

バトラーの人格同一性の議論は明確な批判対象はロックの議論である。そこでロックの議論を振り返ってみよう。ロックは、『人間知性論』第2巻第27章「同一性と差異性」において、人格同一性の問題を論じている。その議論は、1694年の同書の第二版で加えられたものである。ロックは、人格同一性の議論を始める前に、まず実体について、「神」、「有限な知的存在（有限な諸霊）」、「物体」を区別する。次に様相については、それが始まる瞬間に消え去るものであるため、同一性はありえないとする。

ロックは、物体と動植物では個体であることの同一性の基準が異なることを指摘する。物体においては構成要素としての原子の同一性が同一性の基準であるのに対し、動植物の同一性の基準となるものは、明らかにそれらを構成する物質の同一性ではありえない。ロックは、動植物の同一性をその構成に求める。動植物の部分を形成するものは移り変わるが、それが一つの構成を連続的に維持する限り同一であると主張する。ロックによれば、人間の同一性も同様に、「絶えず変わっていく物質分子が同じ構成や身体へ継続して生命あるように合一し、これによって同じ連続的生命を共にする、そうした点だけに存する」とされる。この表現は、後にヒュームが自我の存在を否定的に描写する際に用いた表現のもとになっている。またロックは、人間と同様に知的なオウムであっても、人間とは見做されないという奇抜な例を用いて、人間の同一性が「同じ非物質的精神ばかりでなく、一度に全部取りかえられない同じ継続的身体」（EHU II.xxvii.8）にも依存すると主張する。

これらの考察を前置きとして、ロックは、「人間」の同一性と区別される「人格」の同一性を論じる。ロックによる人格同一性の定義は次のものである。「人格とは、理性と反省とを持ち、自分自身を自分自身と考えることのできる、思考する知能ある存在者、違う時間と場所で同じ思考する事物である」（EHU II.xxvii.9）ロックの定義の特徴は、人格を自分自身が知り、自分自身に対して現われるものと捉える点にある。

意識がいつも思考に同伴し、この意識がすべての人をその人が自分と呼ぶものにさせ、これによってその人自身をほかのすべての思考する事物と区別するから、この意識にだけ人格同一性即ち理性的な存在者の同じなことは存するのである。(EHU II.xxvii.9)

ここから知られるように、人格同一性の本質はその人自身を、他のすべての思考する存在者から区別することにある。すなわち、自分が自分であることは、自分が他人ではないことを示すという実践的な作用なのである。この意味で、人格の存在は共同体的な性質を持ち、自己と他者との区別、すなわち自分が自分であることは、自分自身に対して自分が他人ではない存在であることを知るという働きにおいて成立する。

人格同一性を成立させる根拠をロックは明確に主張している。ロックによれば、人格同一性は意識によって作られるとされる。人格同一性は実体として对象的に存在するのではなく、意識によって、その人に知られるという仕方で成立するのである。その理由は、「ある人間をその人自身にとってその人自身とさせるものは同じ意識だけだから」(EHU II.xxvii.10)であるとされる。ロックは、意識がどこから生じるのかは問題にならないと主張する。問題は人格同一性の根拠であり、同一人格が同一実体の上に成り立つのかどうかの問題なのではないからである。この主張は靈魂実体を人格同一性の根拠とする議論に対する明確な批判であり、その帰結として、ロックは、意識が物質という実体から現れることも考えられるとする。これがよく知られている「思考する物質」の可能性の議論である。これは人間の無知を根拠にして意識に議論の焦点を当てる現象学的方法である。ロックの批判対象は中世以来の靈魂の実体論、およびデカルトの心身二元論であり、意識の成立はその背後にある実体の種類に無関係であるという主張によって心身二元論を克服する可能性を示しているといえる。

ロックが人格同一性の問題を論じる目的は、端的にキリスト教の教義である最後の審判を正当化するため、あるいは、死後の裁きの教義を理解す

るのに必要な理論を提示するためである。これが人間の同一性と人格同一性を区別する理由となっている。人間の同一性であれば、肉体の同一性だけで成立すると考えられ、意識は必要とされない。しかし明らかに、死後には肉体の同一性は確保されないから、人格同一性は肉体を基準とするものではありえないのである。また、死後の裁きが当人に対して有意味であるためには、自分自身が自分の行為の責任主体でなければならない。そのためには自分の行為を記憶し自分の行為として意識していなければならない。意識は幸福と不幸の条件でもある。ロックにおいては死後の幸福が現世の善行の動機とされる。ロックは、人格が法廷用語であると明言している。

ロックの人格同一性論は、ロック以前の人格同一性を靈魂の実体性に基づかせようとする考えを批判し、実体論を前提としないでなお死後の裁きが有意味である条件を人間主体の側から明らかにしようとしたものである。それゆえ、ロックの人格概念は死後の裁きがあるかどうかにかかわらず、道徳的存在を定義する一般的条件として妥当する。つまり、ロックによって本来死後の裁きを正当化するために提示された道徳的存在の理論が、現世における道徳的存在の理解の理論として適用されるのである。この次第は、キリスト教神学の正当化の理論から経験的道徳哲学が成立した過程としても理解できる。

#### 4. バトラーの人格同一性論の概要

上に触れたように、バトラーの人格同一性論は、来世の存在を正当化することを主たる目的にしている。バトラーは議論の初めから、人格同一性の厳密な定義は不可能であるがそれはわれわれにとって経験上明白な事実であると主張する。

つまり人格同一性は存在するかどうか分からない問題なのではなく、存在することが当然な事柄として理解されるべきであるとバトラーは考えている。この立場は、神の存在についての立場と同じである。バトラーは来

世の存在と自己同一性の存在の正しい理解を妨げているとみなす主張を批判し、人格同一性の議論を、来世の存在を確証する議論と一貫した仕方では提示しようとする。バトラーが念頭に置き、批判するのは、ロックの議論である。

バトラーの最初の論点は、人格同一性についての存在論的側面と認識論的側面の区別である。バトラーは、真理についての知識が真理の存在を前提とするのであり、真理を構成するのではないのと同様に、人格同一性の認識は人格同一性を前提にすると述べる。

バトラーによれば、意識が人格を構成すると誤解される原因は人格的存在に意識が伴うことである。しかし過去の行為についての現在の意識が、過去に自分が存在したことを構成するのではない。それゆえ過去の行為についての意識を現在持たなくとも、過去の自分と現在の自分が同一であることが否定されることにはならないのである。

次にバトラーは、植物の場合と人格の場合とでは「同一」という言葉の意味が異なると述べる。植物においては時間の経過とともにそれを構成する粒子が変化することは明らかであるから、植物の同一性は「厳密な哲学的な意味」では成り立たず、「緩やかな民衆的な意味」でだけ成り立つとバトラーは主張する。それに対して、人格同一性は実体としての人格の実在性に基づくというのがバトラーの考えである。同じ人格についての異なった機会における意識は異なったものとなることは当然である。それゆえバトラーによれば、人格同一性は、われわれが異なった意識が同一の対象についてのものであると知ることによって示されるのである。

バトラーの主張の重要な特徴は、われわれの日常的な実践の観察によって示される事実に訴える議論にみられる。もしもロックが主張するように、人格が実体ではなく、意識によって構成されるものであるならば、意識の変化とともに人格も変化することになり、われわれは時間の経過における自分自身の同一性を否定せざるを得なくなる。しかし事態がそのようなものでありえないことは、われわれの普遍的な事実によって明らかであ

るとバトラーは述べる。誰も明日の自分の意識が現在の意識とは異なるからと言って、明日の自分が現在と異なる自分になると信じる者はいない。しかし人格同一性を意識に基礎づけようとする者は、数多くの似た人格が同じ人格であると主張するのである。バトラーはこのことを明白な不条理とみなす。(しかし後にヒュームは人格が実際そのような仕方でも成り立っているものであると主張することになる。)

これに付け加えてバトラーは自らの議論を補強する三つの論点をあげている。一つ目は、人格の実体性が、われわれの絶対的な確信によって支持されるといふ議論である。それに反する議論が誤りであることは、誰もそのような主張に基づいて実際の行動を起こすことがないことから知られるとバトラーは主張している。ここからバトラーは類比に基づいて、現世における人格同一性の確信は来世における人格同一性を正当化すると論じる。この論証方法は、『宗教の類比』全体の中核をなしている。現世における人格同一性の否定を馬鹿げたものとする一方で、それを来世において主張することは「物事のことわりから生じることはありえず、内面の不正や心のひそかな腐敗によるに違いない」とされる。バトラーはこの類比の論法に基づいて、現世における自然の過程の斉一性の信念を来世に適応している。

二つ目は、自己の意識を持ち、過去を振り返ることができる生ある存在が、同一の自己であり続けることは、過去の自己についての記憶とは独立の事実であり、その存在による過去の忘却とは無関係であるという主張である。そして三つ目は、人格の存在論的ステータスについてのものである。過去の自分が同一の人格であることは意識によって知られる。そして人格は実体であるか、実体の特性であるかのどちらかである。人格が実体であれば、人格同一性の意識は実体の同一性として正当化されるし、人格が実体の特性であっても特性はそれが属する実体を変更することはないから人格の同一性は同様に正当化されるとされる。

この議論の最後に、バトラーは懐疑論に対する応答を提示する。バト

ラーが述べるように、この議論は、人格同一性が論証できないが、しかし疑い得ない確信にすぎないとすれば、それが間違っている可能性は否定できない。バトラーは、そうした懐疑論は記憶による知覚の真理にかかわるどのような論証にも同じように適応されるのであり、殊更にこの議論を否定する根拠とされるべきではないとし、その上で、その懐疑にこたえようとする議論は無効であると指摘している。なぜならば人格が同一であるという知覚の真理は、やはり知覚によってしか示されないからである。また知覚能力が正しいことの証明には、知覚能力を用いなければならない。それゆえ「まさに疑われている当の諸能力それ自体を用いることによってしか証明することができないわれわれの諸能力の真理を証明しようと努めるのは馬鹿げている」と述べてバトラーは論を結んでいる。この議論はトマス・リードによる實在論に立つ常識哲学に引き継がれることになった。

## 文献

- Butler, Joseph, *Several Letters to the Reverend Dr. Clarke, from a Gentleman in Glocestershire, Relating to the First Volume of the Sermons Preached at MR Boyle's Lecture; With the Dr's Answers Thereunto*, London: John Knapton, 1716.
- , *Fifteen Sermons Preached at the Rolls Chapel. The Second Edition, corrected: To which is added a Preface*, London: James & Paul Knapton, 1729.
- , *The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature. To which are added Two brief Dissertations ...*, 4<sup>th</sup> edition, London: James & Paul Knapton, 1750.
- , [translation by anonymous author] *Bestatigung der Natürlichen und Geoffenbarten Religion*, Leibzig: in der Weidmannischen Handlung, 1756. [Kessinger Legacy Reprints, 2010]
- Gladstone, W. E. (ed.), *The Works of Joseph Butler II Volumes*, Bristol: Thoemmes Press, 1995.
- Locke, John, *An Essay concerning Human Understanding*, ed. John W. Yolton, rev. eds, two volumes, London: Dent, 1965. [ジョン・ロック (大槻春彦訳) 『人間知性論』 I-IV、岩波文庫、1974。]
- McNaughton, David, *Joseph Butler: Fifteen Sermons & other writings on ethics*, Oxford: Oxford University Press, 2017.
- Mossner, Campbell, *Bishop Butler and The Age of Reason: A Study in the History of thought*, New York: The Macmillan Company, 1936 [reprinted by Kessinger Legacy Reprints, 2010].
- Noonan, Harold W., *Personal Identity* second edition, London: Routledge, 2003.
- Raymond, Martin and Barresi, John, *Naturalization of the Soul*, London: Routledge, 2000.

Tennant, Bob, *Conscience, Consciousness and Ethics in Joseph Butler's Philosophy and Ministry*, Woodbridge: The Bodyell Press, 2011.

Yajima, Naoki, "Why did Hume not Become an Atheist?: The Influence of Butler on Hume's *Dialogues*", *Journal of Scottish Philosophy* 15 (3):249-260, 2017.

矢嶋直規、「ヒューム哲学成立についての一考察：ヒュームとバトラー」、『哲学論集（上智大学哲学会）』46巻、2017。

[翻訳]

ジョゼフ・バトラー、『自然の構成と進行への自然宗教と啓示宗教の類比』[第4版1750（初版1736）]<sup>1)</sup>

付論 I

「人格同一性について」

【439】論文 I 「人格同一性について」

- [1] われわれが来世に生きるのかどうか、このことはおよそ問われる限り最も重要な問題であり、またそれは言語で表現されうる最も知的な問題でもある。だが、われわれの現在の生と死後の生の観念に含意される、もしくは任意の二つの継起的な瞬間における、人格の同一性または等しさの意味に関して奇妙な困惑が挙げられてきている。そしてこれらの困難の解決策は、その困難自体よりも奇妙なのである。それというのも、人格同一性はある人々によって、来世に関する探究を、それを生きる当の人格であるわれわれにとってまったく重要でないものにするようなしかたで説明されてきたからである。そしてそうしたささいな議論によって誤解に導かれる人はほとんどいないが、それでもそれらを考察することも多少は適切なことかもしれない。

---

1) 【訳注】本訳稿の底本には、バトラーが存命中最後に出版した第4版を用いた。便宜的に訳文中に底本には存在しない段落番号を [ ] 内に、また底本のページ改変に相当する箇所を【 】内に示した。Joseph Butler, *The Analogy of Religion, Natural and Revealed to the Constitution and Course of Nature. To which are added, Two brief Dissertations: I. Of Personal Identity. II. Of the Nature of Virtue.* London: John & James Knapton, 1740. テキストについては W. E. Gladstone 編集の *The Works of Joseph Butler, Volume I*, Bristol: Thoemmes Press, 1995 も併せて参照した。

[2] さて、人格同一性の本質は何かと問われるとき、その答えは、あたかも類似性等しさの本質は何かと問われる場合と同じはずであり、それを定義しようとするあらゆる試みはそれを分からなくさせるであろう。ところがその観念を確認することには何の困難も存在しないのである。**[440]** というのも二つの三角形が比較され、一緒に眺められれば精神には類似性の観念が生じるし、二の二倍と四を比べると等しさの観念が生じる。同様にして、任意の二つの瞬間での自分の自我や、自己の存在の意識が比べられると直ちに精神には人格同一性の意識が生じるのである。そして前者の二つの比較はわれわれに類似性等しさの観念を与えるだけでなく、またわれわれに二つの三角形が相似であり、そして二の二倍と四が等しいことを示しもする。そのように、後者の比較は人格同一性の観念を与えるだけでなく、それらの二つの瞬間、例えば、現在とその直前の過去、あるいは現在と一か月、一年、または二十年前におけるわれわれの同一性を示しもするのである。あるいは別の言葉で言えば、現在の自己と、二十年前の自己であったものを反省することで、わたしはそれらが二つの自己ではなく、一つの同じ自己であることを識別するのである。

[3] しかし過去のものの意識は、こうして人格同一性をわれわれに確認させるが、それが人格同一性を構成するとか、あるいはそれがわれわれが同じ人格であるために必要であると言うことは、彼が思い出せるものを除いて人格はどの一瞬間にも存在しなかったとか、一つの行為も為さなかったと言うことであり、実に、彼が反省する行為以外の何も為さなかったと言うことになる。**[441]** そして人は次のことを自明の事柄と考えなければならない。すなわち、人格同一性の意識は人格同一性を前提とするのであり、それゆえそれを構成するのではありえず、それは他の場合に、知識というものはそれが

前提とする真理を構成することができないことと同様である。

- [4] この不可思議な誤りはことによると次の事柄から生じたのかもしれない。すなわち、意識を付与されていることは人格もしくは知的な存在の観念と不可分である、ということである。というのもこのことが、意識が人格を作るというように不正確に表現されたのかもしれない、そしてここからそれが人格同一性をなすと結論されたのかもしれないからである。しかしわれわれが現在何を行い、何を感じるかについての現在の意識は、われわれが今ある人格であるために必要であるが、しかし過去の行為や感情についての現在の意識は、われわれがそれらの行為を行い、あるいはそれらの感情を持った同一の人格であるために必要ではない。

- [5] 植物を通常受け入れられている言葉の意味で同じにするものが何であるのかの探求は、人格同一性の探求とはいかなる関係も持たないように思われる。というのも「同じ」という言葉は植物に適用される場合と人格に適用される場合とでは、異なった主題に適用されるというだけではなく、異なった意味で用いられるからである。というのも、木が五十年間同じ場所に立っていて、ある人がその同じ木に向かって誓う場合、【442】彼は共通の生命を持つ木の特性と使用のすべての目的に関してのみ同じであると言っているのであり、その木がずっと言葉の厳密に哲学的な意味で同じであると言っているのではない。というのも彼は現在のその木のどれか一つの粒子が同じ場所に五十年前立っていた木のどれか一つの粒子と同じであるかどうか知らないからである。そしてもしそれらが一つも共通の素材の粒子を持っていないならば、それらは「同じ」という語の厳密に哲学的な意味での同じ木ではありえない。それらの実体のどの部分も、それらの特性のどの一つも同じではない場合にそれらが同

じであると言うことは用語の明確な矛盾である。つまり、どの実体の部分も同じでないならば仮定によってそうであるし、どの特性も同じでない場合には、同じ特性は一つの実体から別の実体へと移行されえないと認められているからである。そしてそれゆえわれわれが、植物の同一性またはそれが同じであることの本質は、同じ有機体のもとで同じかどうかにかかわらず多くの物質の粒子に伝達される同じ生命の連続性に存すると言う場合、生命や有機体に適用される「同じ」という語は、物質に適用される場合にこのまったく同じ文での意味を表すと理解されることはどうしてもできない。それで緩やかな民衆的な意味では生命と有機体そして植物は、その諸部分の恒常的な変化にもかかわらず同じであると正当に言われる。しかし厳密な哲学的な意味では、【443】誰も、どんな存在も、どんな存在の様相も、いかなる物も、それが実際何も同じものを持たないものと同じではありえない。さて、同じであることは、人格に適用される場合この後者の意味で用いられる。それゆえこれら人格の同一性は、実体に変化すれば存続しえない。

- [6] ここで考察され、そして私が考えるに論証的に決定された事柄は、ロック氏によって「それ、つまり同じ自我または人格は同じ同一の実体であるのかどうか？」という言葉で提示されている。そして彼はその問題に、彼が形の上で与えている答えよりもはるかに良い答えを示唆しているのである。というのも彼は人格を「思考する知的な実体云々」と定義し、人格同一性を「理性的存在が同じであること」と定義しているからである<sup>2)</sup>。そこで問題はその同じ理性的存在が同じ実体であるのかどうかである。だがその問いには答えるまでもない。というのもこの場所では存在と実体は同じ観念を表

---

2) 【原注a】ロック『著作集』第1巻、146頁。

すからである。同じ理性的存在が同じ実体であるかどうかを疑う根拠は次のことだと言われている。即ち、若い日と年老いた日における、あるいは任意の二つの合わさった継起的瞬間におけるわれわれ自身の存在の意識は「同じ個別的な行為」ではなく<sup>3)</sup>、つまり、同じ意識ではなく、複数の異なった継起的な諸意識であるという点である。さて、このことがそうした困惑を引き起こすのは奇妙である。というのも、ある人が、以前に彼が考察した時に同じであった何らかの対象が今同じものであることを知る能力を持ちうることは確かに思惟可能だからである。**【444】**しかしこの場合、仮定によって、その対象が同じであると知覚されている時その任意の二つの瞬間における知覚は一つと同じ知覚ではあり得ない。かくして、われわれがわれわれ自身の存在について有する継起的意識は同じではないけれども、しかしそれらは一つと同じものもしくは対象についての意識なのであり、同じ人格、自己、または生きる行為主体についての意識なのである。その人格の存在についての意識が今感じられ、また一時間または一年前にも感じられていた人格は二つの人格ではなく一つと同じ人格と識別されるし、そしてそれゆえに一つで同じなのである。

- [7] この主題についてのロック氏の見解は性急なものに思われる。そして彼は自分がそれに関連して行った推定に不満を表明しているようである<sup>4)</sup>。しかしそれらの性急な見解のいくつかは他者によって奇妙に引き延ばされている。それらの観念は根底までたどって吟味すると次のことになる私は考える<sup>5)</sup>。即ち、「人格は永続的なもので

3) 【原注b】 ロック、146頁、147頁。【訳注】 ロック、『人間知性論』第2巻8-13節。

4) 【原注c】 ロック、152頁。【訳注】 ロック、『人間知性論』第2巻25-28節。

5) 【原注d】 「ドッドウェル氏への手紙の第三弁論に対する回答」第2版、44頁、56頁などを見よ。

はなく、束の間のものであること。**【445】** 人格は連続的に、生きて死に、始まって終わること。二つの継起する瞬間が一つの同じ瞬間ではありえないと同様に、誰も二つの瞬間ともに一つの同じ人格であることはできないこと。われわれの実体は実際連続的に変化している。だがこのことがその通りかどうかは、その目的には無関係であるように思われる。というのも人格を構成するのは実体ではなく、意識のみだからである。その意識というのは継起的なのだからいかなる二つの瞬間にも同一ではありえないし、結果として、人格もそれによって構成されるものではありえないのである。」そしてここから次のことが帰結しなければならない。即ち、われわれの現在の自己にわれわれが行った何らかの事柄の責を帰すること、または現在の自己がわれわれに昨日生じた何らかの事柄に関心があると想像すること、または現在の自己が明日われわれの身に生じる事柄に関心があると想像することは、われわれ自身の誤謬である。というのもわれわれの現在の自己は実際には昨日の自己と同じではなく、別の似た自己またはその場所に入ってそれと間違えられた人格であり、明日になれば別の自己がそれを引き継ぐのだからである。このことが必然的に帰結する、と私は言うておく。というのも、もし今日の自己または人格と明日の人格が同じでなく単に似た人格であるとすれば、今日の人格は明日の人格に生じる事柄に、他の人格に生じる事柄以上の関心を持つことはないからである。**【446】** おそらくこのことはわれわれが話題にしている見解の正当な表現ではないと思われるかもしれない。なぜならそれを主張する者は、ある人格がその人の記憶が及ぶ限りで同じ人格であることを認めているからである。そして実際、彼らは「同一性」や「同じ人格」という「単語」を利用している。また言語というものはこうした単語が除外されることを許容しない。というのも、もしそうならば、それらの代わりに何か分からない滑稽な婉曲語がそれらに代用されるこ

とにならざるを得ないからである。しかし、彼らの主張を一貫させる限り、その人格が実際に同じであると言うことはできない。というのも、彼らが明確に主張するように、人格の本質をなすものが同じでないとするならば、人格が本当は同じではないということは自明だからである。そして彼らの主張を一貫させるならば、人格が同一であると主張することはできず、私が見るところ、彼らはそう主張してはいないのであり、彼らは人格が実際に同じであるとは言っておらず、ただその人が同一であるのは虚構的な意味においてだけであると言っているのである。彼らが主張するようなその意味でのみ、実際に彼らはこのことを主張しているのだから、たとえ人格の数がいくつであろうとも同じ人格でありうるのである。このような考えを明らかにし、むき出しにして公にするだけで、その最善の反証になるように思われる。しかしながら、それに非常に強い強調が置かれていると言われるので、私は以下の事柄を付け加えておく。

- [8] 第一に、この考えはわれわれが思考を自己に向け、われわれが過ぎ去ったものを顧み、来るべきものを望み見るとき、必然的にあらゆる瞬間にわれわれの胸中に生じる確かな確信に絶対的に反するものである。【447】各人が他者に対して、自分自身と呼んでいる生きた行為主体の日々の変化の想像や、われわれの現世の生全体に一貫しているそうした変化の想像は、事物についてのわれわれの本性的な感覚によるものである。また正気の人が、自分は明日生きるはずだがしかし明日の自分は今日の自分と同じ人格のはずはないのではないかと疑って自分の健康や仕事に関係する行動を変更することはありえない。そしてもしも来世に関して人格はかりそめの存在であるという考えに基づいて行為することが合理的ならば、現世の生に関しても、それに基づいて行為することが合理的であるということ

になる。さてここに宗教とわれわれの現世的な関心に等しく適用可能な考えがある。そして誰もがこの後者の場合に言い表しようのない馬鹿らしさを理解し、感じている。それゆえもし誰かが前者においてそれを擁護するならば、このことは物事のことわりから生じることはいずれ、内面の不正や心のひそかな腐敗によるに違いない。

- [9] 第二に、生きることと行為することが可能で、幸福や不幸になることのできるのは生きた存在だけである。さて、すべての生ある存在はそれらが存在しているすべての時間に同じであり続けるとされている。【448】では今存在していて、そしてある時間生きて存在してきた生ある存在を考えてみよう。この生ある存在は、以前にそれが行い、苦しみ、楽しんだ事柄を、行い、苦しみ、楽しんだに違いなく、それはその存在が今この瞬間に行い、苦しみ、楽しむことを行い、苦しみ、楽しむのと同じように本当である。(私は他ではなく、この生ある存在と言っている)。これらすべての継起的な行為、楽しみ、苦しみはその同じ生ある存在の行為、楽しみ、苦しみである。そしてそれらがそうであることは、それを思い出したり忘れてたりすることのあらゆる考察に先立つのである。というのも、思い出したり忘れてたりすることは過去の事実の事柄の真理に何の変更ももたらしえないからである。そしてこの存在にわずかな知識と記憶の能力を付与されているとすれば、その存在が自分自身が少し前の時間にいた存在と同じ生きた存在であることを知る能力を持ち、自分の行為、苦しみ、喜びのあるものを記憶しまた他のあるものを忘れる能力を持つと思惟することは、その存在が何か他のことを知ったり記憶したり忘れてたりすることを思惟することと同じように難しいことではない。

- [10] 第三に、すべての人が自分は今記憶が届く限りの過去の自分と

同じ人格または自己であると意識している。というのも誰でも自分自身の過去の行為を反省すると、その人はその行為を行った人格、すなわち今その行為について反省を行う人格である彼自身について、ちょうどそもそもその行為がなされたことについて確信するのと同じ程度に確信するのである。【449】 いや、非常にしばしば、それについて彼が絶対的に確かであるようなある行為がなされたことについてのある人格の確信は、彼自身がそれを行ったという意識から全面的に生じるのである。そして、この彼、人格、自己は、実体であるか、それともある実体の特性であるかのどちらかでなければならぬ。もしその彼、その人格が実体であれば、その場合彼が同じ人格であるという意識は、彼が同じ実体であるという意識である。もしもその人格、あるいは彼が、ある実体の特性であってもなお、彼が同じ特性であるという意識は、彼の実体が同じままであるということの確かな証拠である。その確かさの程度は彼が同じ実体であり続けているという意識がそうであるのと同じである。というのも、同じ特性は一つの実体から別の実体へと移行されえないからである。

[11] だがわれわれは、このようにわれわれの記憶が届く限りにおいて同じ行為主体、生きる存在、または実体であると確信している。それでもわれわれは、そこにおいて欺かれているのではないかと問われるかもしれない。そしてその疑問はどのような論証の最後にも問われうるのである。というのも、それは記憶による知覚の真理にかかわる問題だからである。そして記憶による知覚がこの場合に信頼できるかどうかを疑うことができる者は、【450】 それらもまた記憶を含んでいる演繹と論証による知覚が、あるいは実際直観的な知覚が信頼できるかどうかを疑うこともできる。するとわれわれはここから一歩も進めない。というのも、われわれがその真理を、

まさしくそれらと同じ種類の、そしてまったく同じ疑いの根拠が存在する知覚によってしか証明することができないような、そうした知覚の真理を証明しようと試みることは馬鹿げているし、また、まさに疑われている当の諸能力それ自体を用いることによってしか証明することができないわれわれの諸能力の真理を証明しようと努めるのは馬鹿げているからである。<sup>6)</sup>

---

6) 本研究はJSPS科研費20H01180, 16K02134の助成を受けている。

